

# 『国事詩集』 第1巻「政治」部門（1）<sup>1)</sup>

## The Section of Political Affairs of *Poems on Affairs of State*, Volume 1 (1)

里 麻 静 夫

### 要 旨

英国オーガスタン期の詩人ポープが愚人と見なす者達を攻撃する風刺詩にとつての直近の伝統がどのようなものであるかを探るという大枠の中で、『国事詩集』第1巻「政治」部門収録作品の一部を対象にして、主に17世紀後半英国風刺詩の展開を考察する。『国事詩集』第1巻の前書き及び序文のポイントを筆者の見解を交えつつ紹介した後に、ロバート・ワイルドの『北風の道』とエドモンド・ウォラーの『画家への指示』について検討する。これらは風刺詩ではなくて王政復古体制を称賛する詩であるが、新体制を理想視するあまりに現実から乖離した内容になっており、詩としての価値も低い。『画家への指示』は英国最初の画家詩であり、第2次イギリス・オランダ戦争における英海軍の活躍を描いたりする。ワイルドは露骨に追従的な体制擁護に従事しているの、それに対する反発として、反体制派・野党側が画家詩のパロディーによる風刺を盛んに行うようになる。その最初の作品である『画家への第二の助言』（部分的にアンドルー・マーヴェル作と見なす）は英海軍の失態や一部廷臣の悪徳等を風刺の対象としている。この詩の巧みな点とそうでない点を特定したりする。

### キーワード

王政復古、英国風刺詩、ロバート・ワイルド、  
エドモンド・ウォラー、アンドルー・マーヴェル

### I はじめに

筆者はこれまでに、英国の17世紀後半から18世紀前半に掛けてのジョン・ミルトン (John Milton) の『失楽園』 (*Paradise Lost*) や『闘技士サムソン』

(*Samson Agonistes*), アレグザンダー・ポープ (Alexander Pope) の『愚人列伝』(*The Dunciad*) 等における言語の墮落・バベル的状况, その墮落・状况の主体である「愚人」(*dunces*) の表象を研究上の関心の対象の一つとしてきている。そして, その関心の下に, 19世紀後半以降の英国で活躍した小説家アンソニー・トロロプ (Anthony Trollope) の『今の我々の生き方』(*The Way We Live Now*) とジョージ・ギッシング (George Gissing) の『新グラブ街』(*New Grub Street*)<sup>2)</sup> における愚人像の表象について論じたことがある<sup>3)</sup>。そして, その関心の延長で, 『国事詩集』第1巻<sup>4)</sup>の第3部門「文芸」(Ⅲ. *Literary Affairs*) に収録されている詩の一部を材料にして, 英文学における文芸上の愚人像の展開を更に考察した<sup>5)</sup>。本稿では, 同じ詩集の第1部門「政治」(I. *Political Affairs*) 収録作品の一部を対象にして, 王政復古期の風刺詩の在り様の一端を探ってみたい。その際に, 愚人がどう表現されているか確認することを一つの軸にしたい。そこでまず, 『国事詩集』第1巻全体及び「政治」部門の概要や注目すべき点を筆者の幾つかの先行論文の記述を基にして示したい。(以下, 『国事詩集』第1巻を「本巻」とか「POAS1」と略記する場合がある。又, 角括弧を括弧内の語句を囲むために使う場合と, 筆者による加筆や書換えを囲むために使う場合がある。日本語固有名詞に当る英語を補足的に示す場合は, 角括弧内の場合を除いて, 括弧で囲む。このように表記するのは固有名詞の全てではない。)

この詩集は王政復古 (1660年) からアン女王死去 (1714年) に至る時期の様々な風刺詩を取めており, 全7巻である。第1巻は1660年の王政復古から詩人・政治家アンドルー・マーヴェル (Andrew Marvell) が死去して, カトリック陰謀事件 (the Popish Plot) が始まる1678年までをカバーする。「I 政治」(*Political Affairs*), 「II 教会」(*Ecclesiastical Affairs*), 「III 文芸」(*Literary Affairs*), 「IV 肖像」(*Portraits*) の4部門を設けている。収録作品の書き手や主題や手法が様々なので, これらの部門へのアプローチの仕方は一様では

あり得ない。しかし、愚人（風刺の対象である場合と風刺の書き手である場合、その両方である場合がある）及び彼等の生息場所であるバベル的状况をどのように描いているかを、又、特に書き手が三文文士又はそれに類する人物である場合に彼等が活動し、又作り出すところの「クラブ街外的環境」<sup>6)</sup>をどのように描いているかを探ることを、第1巻及び詩集全般に対する共通の視点の一つとし得るだろう。

王政復古期の言説状況に関しては、小野功生氏の説明が参考になると考えている。その概要は以下の通りである（以下、研究や作品の概要や要点の紹介が長い場合は、ダッシュの後に1行空けて示す。概要の中の意味上のまとまりはセミコロンで区切る。概要や要点の紹介が短い場合は、ダッシュに続けて地の文に組み込む）——

17世紀後半に、政治・宗教を扱う文書が当時の出版文化の一大要素になり、風刺や誹謗中傷の言語が文学にも大きな影響を与えた；内乱期に肥大した「誹謗中傷の言説空間」は復古期の主要な文学形式である風刺と密接に関連している；王政復古期の風刺と誹謗中傷の間には境界線を引き難く、風刺の洗練はポープの出現を待つしかなかった；言説空間が多様性を増して、コーヒーハウス等での自由な討論や定期的ニュース報道が生み出した文芸的公共圏では、実態としては理性（礼節、寛容、風刺の崇高性を説く）と非理性（排他性・党派性、誹謗中傷に走る）が入り混じっていた<sup>7)</sup>。

この説明の中では、特に理性と非理性の分け難さの指摘が復古期のバベル的状况の真相を穿つものであり、復古期からオーガスタン期に続く風刺言説の流れを示すものとして重要であると考えられる。尚、小野氏はポープをこの時期の風刺洗練の最終走者として位置付けており、この後に紹介する本

巻序論においても王政復古期風刺の完成形がオーガスタン期風刺であるとされている。しかし、本巻においてはマーヴェルやジョン・ドライデン (John Dryden) もかなり洗練された風刺を書いている。その一方で、ポープの風刺にも非理性的要素がある。これは時代や場所を超えて風刺というジャンルが誹謗中傷と切り離し難いことの証ではないか。

本巻「文芸」部門に関する上記拙論では、パット・ロジャーズ (Pat Rogers) の『クラブ街』<sup>8)</sup> も大いに参照している。これは、主にオーガスタン期の三文作家や低劣な書籍業者を始めとする様々な種類の愚者の生態を詳述する基本文献である。(以下に様々な種類の愚人を示すが、これらの「愚人」及び「愚行」はあくまでも風刺家がそうであると考えてるものであり、筆者がそう考えているのではないことを確認しておきたい。) この書の第1章から愚人の基本的イメージを求めると、貧困と汚濁と病に悩み、暴力と破壊と「異常」性 (これは売春や同性愛を始めとするいかがわしいとされる行為や低俗な見世物を含む) を、つまりは無秩序・混沌をこととしており、狂気、狂信、怒り、喧騒 (騒音発生は著述能力の無さの象徴でもある)、外来のもの (これは外国人を含む)、不安定、怠惰等々の諸悪の器であり、多くは底辺の人物である。更に同書の他の箇所から愚人の特性を幾つか拾うと、彼等は秩序や文明を破壊し得る群衆・暴徒である。愚人は好戦的であり、犯罪や大小様々な争いと結びつく (党派的な彼等は、愚人同士であってさえも争う)。本巻「政治」部門の書き手は経済的・政治的な力が大きい政治家等を含む。

## II 『国事詩集』第1巻の「前書き」と「序文」の諸ポイント

次に、本巻の「前書き」と「序文」から本稿にとって重要であると思われるポイントを幾つか、筆者のコメントを添えて示したい。そうするのは、これらが第7巻までの収録作品全体の文学史的位置付け等に関する重要な知見を含んでおり、解釈の助けにもなるからである。

「前書き」は、先ず、詩集全体がカバーする時期（王政復古からアン女王死去まで）に、公の事柄の風刺が詩の支配的ジャンルになったことを示している（POAS 1, p. vii）。そして、こう続ける――

これまでほとんど知られていない時事風刺は従来ドライデンやポーブの風刺の花が咲く堆肥であると見られていたが、公の事柄と文芸上の論争点に関する情報の宝庫である；それらは風刺諸手法の起源と発展に関して多くを教える；詩の精神は、風刺と党派性に深く関わることによって粗野になりはしたが、同時に生命を与えられもした。（*ibid.*）

風刺と党派性がこの時期の詩に与えた影響に関しては、小野氏の公共圏に関する説明（前述）を参照されたい。

「序文」に入ると、最初の「国事詩集とは何か」という節において、王政復古期は風刺の偉大な時代であり、この時期の風刺は本詩集第2巻が収録するドライデンの『アブサロムとアキトフェル』（*Absalom and Achitophel*）を頂点とする、この詩はこの時期の二大関心事である政治と風刺を結合している、と述べる（p. xxv）。ドライデンの作品としては、第1巻が収録する『マクフレックノー』（*MacFlecknoe*）もこの時期の風刺詩としては最重要なものの一つである。この詩には『アブサロムとアキトフェル』が有する（直接的な）政治性はないが、『愚人列伝』に決定的な影響を与えた点でも重要である。その影響に関しては、本巻「文芸」部門に関する上記拙論（2021年）が扱っている。

次に、国事詩が17世紀後半から18世紀前半にかけて大人気であり、国事詩集が主要な作品集の形態だった（POAS 1, pp. xxv-xxvi）、「国事」という言葉の意味は今の我々が考えるよりも広くて、国事詩の関心はあくまでも国事に関わる「人間」だった（p. xxvi）と述べた後に、こう書いている――

権力の諸中心から放射される影響力を吹き込まれる者の中に、公的事柄について書く者達が居た；それら風刺家の周縁に位置するのが、クラブ街に匿名で潜む、非合法化された政治又は宗教の党派のプロパガンダを行う者だった；最周縁には暴漢や洒落者等がいて、この時点で、政治風刺と社会風刺が癒合する。(pp. xxvi-xxvii)

風刺詩の書き手に関しては、少し後で、より詳しく分類している――

①有名作家（ドライデン、マーヴェル、ロチェスター伯爵 [the Earl of Rochester], ジョナサン・スウィフト [Jonatah Swift], ポープ等）；②主に宮廷の事柄について書く、通の集団（バッキンガム公爵 [the Duke of Buckingham], マルグレイヴ伯爵 [the Earl of Mulgrave], ヘンリー・サヴィル [Henry Savile], ジョージ・エセレッジ [George Etherege], チャールズ・セドリー [Charles Sedley] 等）；最大集団であり、ほとんど特定できない集団の内の③ほとんど無名の愛国者・憂国の士（スパイであり、プロパガンダを行い、マーヴェルの友人でもあるジョン・エイロフ [John Ayloffe] やチャールズ2世を風刺して処刑されたスティーヴン・カレッジ [Stephen College] 等）と④生活のために書く三文文士；これらの集団の中では、商業的ヘボ作家が最も特定しにくい；その理由としては、個々の文体的特徴又はイデオロギー上の一貫性が乏しいこと、社会的に取るに足らない存在なので、彼等に関するゴシップが生じないことを挙げ得る。(pp. xxxi-xxxii)

この分類で例示されている書き手の多くについて「文芸」部門に関する拙論が扱っているので、参照されたい。ヘボ作家という人種と彼等の作品の両方が十把一からげであることを、後にホープの『愚人列伝』も再三指摘

することになる。筆者としてはこのヘボ作家の群衆を、『愚人列伝』の表現を用いて、「貧困と詩の洞窟」（1729年版第1巻32行；1743年版第1巻34行）の住民達と呼びたい<sup>9)</sup>。彼等はその境遇故に精神異常を来すこともあるし、犯罪（盗作等の文芸上の犯罪を含む）に走ることもある。何よりも、元々通常の状態ではなかったり、暴力的であったりする。要するに、人間的欠陥と社会悪の寄せ集めの存在として描かれることが多い。

「序文」の第2節「作品の流布」の以下の記述は、主として本論考で取り上げる「政治」部門に関する――

1660年代初期の反政府的韻文で見ると、*「画家への助言」* 詩（何れもマーヴェルによる1665年の『画家への第二の助言』〔*The Second Advice to a Painter*〕と66年の『画家への第三の助言』〔*The Third Advice to a Painter*〕）くらいである；1660～66年にはチャールズ2世と彼の大臣達は詩人から頌徳文しか受け取らなかったようだが、ドライデンがその基調を定めていた；エドモンド・ウォラー（Edmund Waller）は、『画家への指示』（*Instructions to a Painter*）でオランダ軍に対するヨーク公（the Duke of York）の勝利を称え、延いてはチャールズ2世を称賛している；だが、この作品が体制と詩人の蜜月に終止符を打った；反体制派のマーヴェル等にとって宮廷・政府を風刺する格好の道具を提供したからである。（p. xxxiv）

画家詩のパロディーは、ウォラーが描く理想像と現実がいかに乖離しているかを示している<sup>10)</sup>。（以下、『画家への第二の助言』や『画家への第三の助言』等を『第二の助言』とか『第三の助言』等と略記する場合がある。又、これらの詩の形式を「画家詩」や「助言詩」と称する場合がある。）

マーヴェルの「助言」はまだ国王を風刺の対象から外しているが<sup>11)</sup>、政

権はこの作品に懸念を抱いた。画家への助言詩群はこの時期に印刷された少数の反体制風刺作品であるが、無許可印刷されたものが多い。又、印刷される前に、原稿の形で広く出回っていたようである。これらの事情は助言詩の人気の高さを物語る。政府の弾圧にも拘らず、出版者は反体制風刺作品の発行を止めなかった (pp. xxxiv-xxxvi)。

風刺詩の多くが原稿の形で出回っていた (p. xxxvii)。そのような原稿流布の温床がコーヒー・ハウスだった (p. xxxviii)。ここは、小野氏の文芸的公共圏の説明と直接関わる個所である。筆者としては、風刺原稿流布をバベル的状况進行の現象の一つと捉えたい。1670年代のコーヒー・ハウスが当局から悪の言論 (彼等には完全にコントロールし得ないことば) の発生源と見られていたことに留意したい。

チャールズ2世と政府がコーヒー・ハウスを敵視するのは、政治権力に関する古い見解 (国事は普通の臣民に知らせるものではないという考え) を持つからである (p. xxxviii)。神授の王権という考えは17世紀に徐々に信を失っていくが、本詩集の時期になっても、国事は平民が関心を寄せるものではないという疑似宗教的な直感が残っており、特にドライデンの著作においてそうである (p. xxxix)。神授の王権という原理に基づく検閲・弾圧が却って風刺を助長した。復古期に風刺が溢れるのは、政府とその機関紙が国家的諸問題の周りに築き上げている沈黙の壁を突き破ろうとする願望の現れだった。コーヒー・ハウスを通して広められた [政府から見て] 「扇動的な」文章が、[本詩集がカバーする] この重要な時期に、イングランドの人々を教育し、覚醒させ、時には誤った方向へ導く上で大きな役目を果たしたことは疑いない (p. xxxix)。人々を時として誤らせるのは、(小野氏が指摘するように) この種の文章が理性と非理性の混合の産物であることから当然生じる性質の一つであろう。

第3節「国事詩と歴史」は政治が主題の作品に関わる記述が多い (「文芸」



部門に関する拙論ではこの節の要点提示を行っていない)。先ず政治風刺の歴史上の出来事への関わり方に関して、偏った見方や私的動機で歪んでいようとも一応出来事の記録である、復古期政治詩はイングランドの出来事をかなり規定した (p. xlii), 出来事に対するトピカルで人間重視のアプローチが復古期政治風刺詩の大きな特徴である (ibid.), と書いている。人間重視のアプローチに関して、この詩集の選集の序論では、権力者の人間的側面への関心の増大が権力者の脱神秘化の過程でもあることを指摘している<sup>12)</sup>。

次に、時事詩の中の英雄詩（『画家への指示』やドライデンの『驚異の年』[*Annus Mirabilis*] のような）と風刺詩という二つの様式を比較することが重要である（互いの性質が浮き彫りになるから）として、こう続ける――

英雄詩は読者の内に賞賛・驚嘆の念を生むのが目的であり、風刺又はパーレスクは笑いを生むのが目的である；英雄詩は、同時代の人物や出来事を叙事詩又は聖書の英雄の伝統と想像の上で同一視するのが目的である；英雄詩の手法は、それ故必然的に、入手できる事実の山の中から慎重に選んで、選んだ詳細な事柄を理想化するか高めるかするものになる；又、これら詳細を神話的先例と巧みに結び付けるものになる；風刺家も大量の事実から選別するが、グロテスク且つ馬鹿げて見えるような詳細に特に注意を払う；風刺は詳細を生き生きと自然主義的に扱う；風刺家が英雄との連想を用いるとすれば、それは理想の過去と対比して現今の現実を中傷するためである (pp. xlv-xlv)；英雄様式と風刺様式はイデオロギー上の対立を反映している；前者は伝統的価値観、儀式、神話への信念に訴え、後者は経験主義的で懐疑的で批判的な姿勢に訴える (pp. xlvi-xlvii)；この時代の状況から、風刺様式の姿勢が英雄様式よりも権威を有することになる。(p. xlviii)

「序文」第3節の中の「政治の道具としての復古期風刺詩」という題の部分においては、この時期の大量の風刺が歴史形成に影響を与えたことは確かだし、政治の道具として重要性を有していたとして (p. xlviii)、チャールズ2世の弟である〔ヨーク公転じて〕ジェームズ2世の失墜に風刺が果たした役割を見ている (pp. xlviii-xlix)。そして、1688年の名誉革命は風刺が60年代から警告していたチャールズ2世と彼の弟の危険性が顕在化したことへの自然な反応だった、と述べている (p. xlix)。

「序文」の最後の第4節「文学としての国事詩集」では風刺の構成要素は多様であり、それに呼応して形式も多様であるとして、以下の形式を挙げている——バラッド、風刺歌、ニセ連禱、素朴な告白、対話、夢、幻視、動物の寓話、詩人の裁判、画家への助言、モック・エピック (p. lii)。これらの中で、「詩人の裁判」が「文芸」部門において目立つ形式である一方で、「画家への助言」は「政治」部門で目立つ形式である。この部門では、数の上では圧倒的に多い駄作と少数の名作が相互に影響を及ぼしている。(詩人の裁判又は裁判詩の形式を取る作品についても、本巻「文芸」部門に関する拙論を参照されたい。)

画家詩の中では、マーヴェルの『画家への第三の助言』が最も優れている。悲劇のヴィジョンと風刺のヴィジョンを結合しており、擬似絵画的効果を有しているからである (p. lii)。この擬似絵画的効果を、ドライデンの風刺が完成した (p. liii)。そして、「序文」をこう締め括っている——本詩集の多くの無名の詩は、時事詩が芸術になろうと苦闘している例である；これらの例から学びながら、偉大なオーガスタン期の作者が風刺を芸術として完成させることになる (p. lvi)。

ポープがドライデン及びその他諸々の詩人の技法を継承する部分が大きいというのは、文学史的常識に数えられるだろう。しかし筆者としては、マイナーな詩人達も参加して築き上げた詩の伝統・慣習がドライデンやポー

プという大物の作品形成に貢献しているという本詩集編者の指摘を取って銘記したい。と言うのは、その伝統・慣習にはクラブ街的環境の側面（風刺と誹謗中傷の不分明等の諸要素）があったと示唆したいためである。

### Ⅲ 「政治」部門収録作品の一部に関する考察

本詩集が最初に収めるのは、ピューリタンの聖職者であり国王派である詩人ロバート・ワイルド（Robert Wild）作『北風の道』（*Iter Boreale* [1660年]）である。題名は、軍人ジョージ・マンク（George Monck [1608～70年]）が護国卿政治が終るとスチュアート朝復活を目指してスコットランドからロンドンへ行軍することを意味する。本巻の解説は、この詩がチャールズ2世復帰を祝って大人気を博し、残部議会の風刺としても一番人気があった、マンクによる復古実現を称えているが、当時の二流政治詩の諸特徴をよく示している、復古前後の興奮や先行体制への一般の軽蔑をよく表している、と述べている（POAS 1, pp. 3-4）。以下にこの詩の概要と筆者のコメントを示す。この作品は16の連から成るが、概要提示に際しては、例えば第1連は「連1」のように記す。

連1（1～22行）で詩人／語り手が、内乱〔ピューリタン革命〕を描くのに適していた悲劇の詩神を追放したい、復古という夜明けが来たので、自分ももう悲劇を書かない、今度は一番陽気な詩神の助けを借りて下手な詩作を再開したい（"I'll scribble once again"）、と宣言している（1～15行）。そして、内乱という血腥い剣が気高い英国詩の流れを断ち切ってしまったので、僧侶の自分が詩を書くしかない、その詩の出来は大したものではないだろうが、主題そのものは立派なので我慢してほしい、と続けている（16～22行）。

連2では、内乱・共和国期は自由を奪われて国の荒廃を眺めるしかなかったが、今からマンクについて歌うと宣言する（23～42行）。続く連3及び連4で、護国卿オリヴァー・クロムウェル（Oliver Cromwell）死後の経緯を

語るが、ここでワイルドはクロムウェルを悪魔の直系として描いている。敵を悪魔にたとえるのは至極平凡なやり方なので、対立する双方が同じ比喻に訴えるとしても全く不思議ではない。本巻では、ワイルドとは政治的に対立するマーヴェルが、『画家への第三の助言』において、第1代クラレンドン伯爵（1st Earl of Clarendon）と彼の娘アン（Anne〔後のヨーク公夫人〕）を悪魔の一味として描いている（『画家への第三の助言』、290行）。オリヴァーを悪魔の系譜に連なると見れば、護国卿時代（1635～59年）をバベルの塔にたとえて、それが瓦解したのでオリヴァーの息子リチャード（Richard）が簡単に失脚した（65～68行）と書くのは自然な流れであるだろう。他に、この時期に残部議会が復活したりして（前述の本巻解説を参照）、私利私欲のために画策するものが多かった、と書いている。

連4は内乱・共和国期に関しては別のたとえも用いている——昔エジプトを襲った疫病より悪い病が英国を襲った、と書くのだ（83～84行）。現在の事柄に歴史上の又は神話・伝説上の有名な出来事を重ね合わせて良い面や悪い面を拡大する手法を用いているが、ここでは悪い面を誇張している。連5も王政復古より前の英国を思い病にかかった人にたとえている。その英国が、自分を治す薬は国王だけである、と叫んだ（134～35行）。

オリヴァー・クロムウェルに関して行っているような悪魔へのたとえは、連7にもある。救いを求めて叫ぶ英国を助けようとして蜂起した人々を弾圧した一党をベゼルバブとその手下の悪魔達にたとえている。この一党は教会や大学等を食い物にしたが（連8）、マンク登場で「風向き」が変わった（連9）。「北風」のマンクがスコットランドで反共和制の炎を起してからロンドンへと南下するのだが、その行軍が実際は困難だったのを神の助けがあって楽だった、と虚構化している（本巻257～67行の注を参照されたい。以下、本巻の注は“POAS 1, 257-67n”のように表記する）。

連14は、マンクがチャールズ2世をブレダへ迎えに行った際に自然（海

の生き物等)までが歓喜の様子を示した、と書く(358~69行)<sup>13)</sup>。連15はチャールズ2世のロンドン到着時の人々の歓喜の様子を描くが、国王神秘化の道具(やたらとオーバーで超自然的な現象等)に溢れている。ここで行われ始めている国王神秘化がそれとは逆の脱神秘化へ転じるのが、王政復古期時事詩の流れの一つである。詩を締め括る連16では、反王党派を異教の神々扱いして、それらにマンクが単身立ち向ったというように、マンクの超人的能力と活躍をこれでもかと言うくらい示している。これらのナイーブな誇張が、本巻解説が言うように、この作品が二流であることの証の一つである。

先に、本巻「序文」第2節に関してこう書いた——ウォラー作『画家への指示』が反体制派のマーヴェル等にとって宮廷・政府を風刺する格好の道具を提供した；彼等は画家詩のパロディーを行って、ウォラーが描く理想像と現実がいかにか乖離しているかを示している。理想と現実の乖離は、ワイルドによるマンクの超人化や国王の神秘化についても言える。ワイルドの詩がパロディーされたかどうかについて本巻の記述はない。しかし、彼の称賛があまりにも嘘くさいと感じた人々がいたことは容易に想像できる。行き過ぎた賛美が賛美の対象の真価に対する疑いを生むことはあっただろう。風刺の手法が自然主義的であると本巻「序文」第3節が述べていることも紹介済みである。そのような様式が理想から現実への揺り戻しの器になるのは自然な成り行きであろう。しかし、ここで指摘しておきたいのは、その風刺にしても悪の誇大化やでっち上げ等を行って行き過ぎる場合があることだ。小野氏が言うように、風刺と誹謗中傷との間には境界線が引き難いのである。そして筆者は、前述のように、そのような風刺の不純性は王政復古期に限定されるわけではなくてある程度普遍的であり、例えば後のポーブの風刺にも当てはまる時がある、と考える。

連3以降は、上記の本巻解説にあるように、当時の二流詩の諸特徴を色々

と展示しているようだ。しかし、連1に関しては駄作の書き出しとして片づける以外の評価の仕方もあり得る。「下手な詩作を再開したい」という述懐が謙遜になっておらず、実際にその言の実践で終わっているのは滑稽である。この詩は称揚詩の要素が風刺の要素より多いが、総体としては三文文士（愚人の一種）の作物のようなものである。とは言え、チャールズ2世の英国帰還が文芸の面でも重々しい悲劇から陽気な詩への主流の変更を招いたと祝い、文芸形式の序列の変化を宣しているのは、内乱・共和国期の崩壊と王政復活という体制の大転換をどのように表現すべきかと二流詩人なりに考えを巡らした上でのことだろう。新時代を表すにふさわしい形式の模索は、次に考察する英国で最初の画家詩の作者ウォラーと通じる点がある。ワイルドとウォラーの大きな違いは、前者が「気高い英国詩の流れ」を汲む（つもの）詩作をするのに対して、後者が新時代の英国を表すために英国では新規の形式を採用し得たことである。こうすることで英詩の形式の幅を広げた点は評価すべきである。但し、新体制を擁護しようとしてむしろ逆効果に終る駄作しか書き得なかった点は共通である。

次に、これまで何度か言及している国王側の詩であるウォラーの『画家への指示』（1665年）を眺めよう。この指示とは、チャールズ2世の海軍の状態、それが王弟ヨーク公の指揮下進行する様子、そしてオランダに対する戦勝を描くためのものである。本物の絵一枚では描き切れない情報を盛る手法であるが、1655年にヴェネツィアが海戦においてトルコに勝利したことをテーマにするイタリアの画家詩をモデルにしている（POAS 1, pp. 20-21）。ウォラーがこのジャンルに付け加えた要素と、その模倣であるマーヴェルの作品によって、このジャンルが完全な風刺性を備えるようになった<sup>14)</sup>。ウォラーはヨーク公を称えるあまりに失態もあった海戦の模様を一切省いたので、後続のマーヴェルが省略を補って、野党の立場からそのパ

ロディーにしたのである<sup>15)</sup>。体制側による国王とその仲間への称賛が行き過ぎた結果反体制側に体制攻撃の格好の材料を提供することになったのは皮肉な成り行きである。画家詩の形式は細部に強いので、グロテスクを目指す風刺の有効な道具になった（POAS 1, p. 21）。その形式を武器の一つにして、本巻「序文」第3節のポイント紹介にあるように、風刺が国王や王弟の危険性を警告していくことになる。

以下にこの詩の概要を、筆者なりに内容を区分して示す。それらの区分を斜線で分ける（太字の数字は行番号を、〔…〕は省略個所を表す）——

1～24： 先ず、世界と我が国の間の海を描け；その海に、交戦準備を整えている英国艦隊とオランダ艦隊を配置しろ；〔…〕イングランドの若者が提督——嘗て武勲を上げた勇敢な〔ヨーク〕公爵——の周りへ群がるさまを描け；この公爵の剣が今や、兄王の栄光と祖国の大義というより高い利子を引き出すのだ；この英雄に率いられて、希望と勇気が国全体に広がるさまを、皆が征服か死かであると決意しているようであるさまを描け；彼の船の帆は、風で膨らむよりも、彼の血統に対する意識と名誉心で膨れ上がっている；〔…〕／25以下： ヨーク公率いる英海軍が海を支配していて、オランダの船が怖がっている、等々〔…〕／48以下：〔…〕／55以下： 英国の小艦隊がオランダ艦隊を破った／65以下： スミルナでの海戦よりは英国に近い場所での、オランダ軍をその停泊地で撃とうとして果せなかった出来事を脚色／77～90： 英海軍が母国へ帰って補給している間に、〔壊滅の危機を逃れた〕オランダ軍が出張って来た／105以下： いよいよ大海戦が始まる／110辺り： この海戦は〔紀元前31年にオクタウィアヌスの軍がマルクス・アントニウスとクレオパトラの軍を破った〕アクティアムの海戦より大きい／123以下： ヨーク公の勇姿／127以下： アクティアムの海戦と比して今回の海戦が数段激しく重要なものであることを、しきりに

強調；アキレスとフリギア人との戦より困難だった、とも／145辺り：〔…〕  
／160以下：〔…〕／185以下：〔…〕／205以下：〔…〕／229以下：〔…〕／  
242以下：〔…〕／259以下： 勝利した英軍がオランダ本土をも脅かした／  
283以下： オランダ人が自国の失態を責めた／287～98：〔…〕／293以下：  
〔…〕／297～98：〔…〕

55行以下においては、実際の英国側のダメージは省いている。オランダ側も大した艦隊ではなかったのが、英国の勝利は自慢するほどのものではない。65行以下に関しては、英国側の総大将であるヨーク公の失態で敵艦隊を壊滅させる機会を逃したというのが史実であるが、それとは異なり、英国側を立派に描く空想的な部分になっている。77～90行においては、帰港した艦隊の乗員等が女性を相手にしたりしてどんちゃん騒ぎをしたが、海上で危険な目に遭っていたのだからそれも無理はないというように、否定的に描いてはいない。このような行動を、例えば『画家への第二の助言』は英海軍の怠惰・無能等を示すものとして扱っている。283行以下に関しては、英国側にも失態が幾らでもあったというのが真相である。

海戦の描写の指示を終えた299行以下では、戦勝後の議会とチャールズ2世の様子を描け、「彼の姿を若いアウグストゥスに似せろ」(301行)、議会や国民が王と王弟を讃えるさまを描け、と指示する(～310行)。そして、アウグストゥスを持ち出すだけでは足りないとはばかりに、「国王へ」(To the King)という反歌をつけ足している(311～36行)。そこでは、王がいかによく海軍を率いて英国を勝利に導いたかを語ったり、彼を古代の英雄や神と同列視・神格化したりしている。

以上の簡単な内容紹介からでも、ウォラーがワイルド張りの神話化や事実の脚色に励んでいることが見て取れるだろう。この詩に関する本巻解説は、復古後最初の5年間は王や政府への批判めいた詩はほとんどない、と



述べている（POAS 1, p. 20）。又、『北風の道』に関する本巻解説は、その詩と本作の間に見るべき反体制詩がほとんどない、と書いている（POAS 1, xxxiv）。王政復古直後は王や政府の問題点がまだよく認識されていない時期なので、国王・宮廷に対して称賛がご祝儀相場的に多数浴びせられるのはある意味で自然であるとしても、彼等の新体制にとって不幸だったのは、体制初期に詩壇を独占していた称賛詩の出来が悪かったために、体制への不平不満を公表する者が少ない好機だったのに、その強化に貢献するよりはむしろより質の高い反体制詩の台頭を許したことだろう。

『画家への指示』が行う露骨に追従的な体制擁護に対する反発として画家詩のパロディーによる風刺が盛んに行われるわけだが、本巻がその最初の作品として収める『画家への第二の助言』を眺めよう。本巻はマーヴェル作としているが、H.M. マーゴリアスのオックスフォード大学版と主としてそれに基づく吉村伸夫氏の邦訳詩集<sup>16)</sup>にはない。本巻編者であるロード編のエヴリマン版にはある。但し、エヴリマン版と本巻では、語句と句読に少し違いがある。2007年刊のナイジェル・スミス編の詩集には、『画家への第三の助言』と共に載っている<sup>17)</sup>。

先ず、本巻解説（POAS 1, pp. 34-35）のポイントを示す（角括弧内は筆者による補足）――

ウォラーの『画家への指示』の構造・文体・姿勢をまねて馬鹿にしている詩人は、自分が用いている手法に対する意識がウォラーよりも強くて、絵画の諸手法に繰り返しコメントしている；ウォラーより主題を拡大して、〔第2次イギリス・オランダ戦争（1665～67年）〕の最初の1年の全体を描く；ローストフトの海戦でヨーク公が敵艦隊の追跡を怠ったことを詳細に描く；政治家と海軍将校を辛辣に扱っているが、

反歌においては国王と大臣達を慎重に区別して、前者に対する非難を控えている；本作と『第二の助言』に関しては、作者をマーヴェルとしても差し支えない；版によっては他の詩人の名を冠しているものがあるように、真の作者を隠蔽しようとする工作もある。

次に、筆者が参照したマーヴェル詩集としては新しい方のスミス編詩集の解説のポイントを、本巻解説を補うと思われるところを中心に紹介したい。先ず、画家詩3篇と『クラレンドンの新築祝い』(*Clarendon's Housewarming*)に関して、こう述べている――

これらの風刺は、第2次イギリス・オランダ戦争の一連の風刺詩の一部である；これらは、海軍の不手際と宮廷の腐敗への懸念から英国国教会の主教への攻撃へと変化した；これらは、クラレンドン政権への不満を表現する主要手段だった；名誉革命後、国事詩集においてマーヴェル作とされた；これらは、「マーヴェルの詩」と言えばスチュアート朝の不正行為に対する抵抗を意味していた時期の一大王政復古風刺詩群の一部を成す。(Smith, p. 323)

作者が誰かについては、こう述べている（角括弧内は筆者による補足）――

『画家への最後の指示』〔この詩は、以後、『最後の指示』と略記する場合がある〕については、マーヴェル独自の詩的表現が多いということから、マーヴェル作とされていることに疑問が呈されたことはない；『第四の助言』と『第五の助言』は『最後の指示』より短くて、着想が異なっており、一般的に、マーヴェル作とされる三作品より劣ると考えられている；1950年代から70年代にかけての研究では『第二の助言』

と『第三の助言』をマーヴェル作としない場合が多いが〔マーゴリアス版がその場合に含まれる〕、最近では、言い回し、作詞法、押韻により注意することで、この二つの詩にはマーヴェルが書いた部分があるのではないかと考える研究がある〔スミスもそう考えている〕；『第二の助言』と『第三の助言』は戦時政府を困らせようという明確な政治的目的を持ち、幅広い流通を狙って非常に急いで書かれた可能性がある〔ので、出来の悪いところがあるのではないか〕；又、作者が自分であることを隠す必要があったのではないか〔本巻解説も指摘している点〕；助言詩の出版者が罰せられたことがあるので、マーヴェルとしては助言詩のプロジェクトへの関りを隠すのが得策だった。(Smith, pp. 323-24)

筆者としては、本巻編者ほど確信をもってマーヴェル作とはせず、スミスに従って、部分的にマーヴェル作とする。

画家詩群の政治的背景についてのポイントは以下の通りである（角括弧内は筆者による補足）——

第2次イギリス・オランダ戦争で英国は当初勝利を取めたものの、海軍の優勢を活かすことができず、その勝利の価値が損なわれた；海軍内部に対立があったし、戦費も不足していた；ローストフト海戦で失態を演じ〔既述〕、4日戦争（1666年6月）で完敗した；又、ロンドンの大悪疫（1665～66年）とロンドン大火（1666年9月2～6日）が士気をくじき、最終的にオランダ軍によるメドウエイ川襲撃という屈辱を蒙ることになった；この結果、クラレンドンによる議会支配が瓦解して、国王が彼への信頼を失った；1667年になると、宗教的寛容の問題が再浮上した——非国教徒支持者が有利になり、騎士議会〔これはチャー

ルズ2世の王政復古時代の王党派である騎士が絶対多数を占めた議会(1661~79年)であり、クラレンドン法典を成立させ、国教体制を確立した]を支配するトーリーと国教の同盟に不利になった；次の10年間で支配的になる宗教上の諸争点があるが、この期間に初めて慎重に調査された；宮廷と議会で、より効率的な統治と信仰への更なる寛容を求める声の一部が出た——その最たるものが、バッキンガム公爵とアングルシー(Anglesey)伯爵だった；バッキンガムは国王の首席大臣になるべく招かれて、あっという間に失敗することになる；アングルシーは行政の才能の持ち主であり、熟練法律家だった；このアングルシーとマーヴェルが、70年代に大いに関わりを持つことになる。(Smith, pp. 325-26)

政治的背景について、更にこう書いている(角括弧内は筆者による補足)——

出版物は復古以来厳しい検閲を受けていたが、その一方で世論が戦争と寛容の政治において重要な役割を果たしていた；政府は共和主義の第五列〔=戦時に後方攪乱・スパイ行為等で他国の進撃を助ける者〕を特定していたし、政府機関紙はある共和主義の党派がオランダを対英戦に駆り立てたと報道した；〔本作への反論詩を書いたクリストファー・〕ウェイス(Christopher Wase)は『第二の助言』の作者が内乱時の共和国に共感を持つと疑っている；意見を持つ者が架空の〔危険〕人物を生み出して、それが今度は、様々な〔現状への〕参加者の恐怖を煽った；この恐怖に根拠はなかったものの、鍵となる人物の決定に影響を与えたという点では現実のものだった；これを背景として、画家への助言詩群は重要な役割を果たした。(Smith, p. 326)

作品そのものの評価へと転じて、こう書いている(角括弧内は筆者による

補足)——

画家への助言詩群において、マーヴェルの知識と人物批評は（新聞のような）特定のソースに結び付いておらず、出来事に関する様々な意見や特定の情報の集塊に基づいているようだ；マーヴェルの人物評価は彼と同じ位情報通である〔サミュエル・〕ピープス (Samuel Pepys) のそれとは異なるものの、彼の情報はピープスのそれと同じ位眼識があり、正確であるようだ（ローストフトの戦いの記述のように）；本詩集の三つの画家への助言詩は蓄積された情報を使っているようだ——出来事により近い出版物が不完全な情報に基づいているのとは違って；これらの画家への助言詩は、政治的な応酬であることに加えて、詳細な詩の応酬である。(Smith, p. 327)

スミス版解説の最後の「ソース、ジャンル、美学」というセクションのポイントは以下の通りである（角括弧内は筆者による補足）——

ウォラーの称賛の仕方を利用して応えることで画家詩群が生れたわけだが、反論の形式としてウォラー的称賛を王党派と共和主義の両方の観点から模倣することは、ウォラーがクロムウェルに向けた称賛と哀歌を発表した50年代によく行われていた；マーヴェル作とされる三つの画家への助言詩を統一するのは、絵画の詩的解釈に対する関心である；マーヴェルの風刺はスチュアート朝文芸の伝統全体をかき乱して反転させるものであると見ることもできるかも知れない；画家（への助言）という趣向を用いることでマーヴェルは、ウォラーやドライデンその他の政府擁護者が好む英雄詩的語りと対立する批判的姿勢を取り得ている；画家への助言詩は国民の生活の公式な描写を批判する対

抗文化の中心的要素と見て良いかも知れない——公式文化〔『北風の道』がそれに属する〕において国王は、海軍力と植民の努力により通商を進展させることの重要性をよく認識しているように表されているからである；画家のモチーフは政府、宮廷、海軍に関する事柄に限定されておらず、60年代半ばには、大きな広がりを持った——例えば悪疫を描いたり、（嵐の中の船を人生やベストの猛威と類推させたりして）海の主題を家庭や都市の諸テーマに当てはめたりしている。（Smith, p. 328）

以下に作品の概要を示して、筆者のコメントを付す。複数の段の概要を統合して大きな区分にして、『画家への指示』のその体裁で示す場合がある。コロンの前の数字は行番号である。複数の概略のまとまりが連続する場合、それらのまとまりの間に1行空ける場合がある。本巻の注の他に、主としてスミス版とエヴリマン版の注を参考にした。これらの注を地の文に組み込む場合、例えば1行目に関する本巻のものであれば“POAS 1, 1n”と、スミス版のものであれば“Smith, 1n”と、エヴリマン版（Everyman's Library edition）のものであれば“Everyman, 1n”と記す。

1～12： 画家よ、これまでにウォラーだけが勇敢にも書いた戦いを——その場にいた兵達でさえ見るのが怖かった戦いを——描こうとするのなら、先ず、〔英国のサー・トマス・〕アリン（Sir Thomas Allin）の英雄的行為を描け。彼はヘラクレスの柱〔ジブラルタル海峡〕を襲った。そして二隻の軍艦を降りたが、それは件の柱をイギリス海峡へと運んで、新たな航路標識にするためだった。

本作は題名の下にウォラーの模倣であると明記しているのだが、画家詩形式の最初の模倣なので、元歌が誰によるどういうものであるかを本文冒頭でも読者に確認させている（これに続く他の画家詩ではそうしていない）。風

刺の意図を明確にしてその効果を高めるために、そう説明する必要があったのだろう。英雄の働きをしたと書かれるアリンだが、実際のところ、交戦上の判断ミスから二隻の艦を座礁させていた。ウォラーの悪意ある模倣をしているので、体制側にとって都合が悪いことに対してウォラーがするであろう脚色を施すことになる<sup>18)</sup>。

**13～24：** 炎上して失った軍艦「ロンドン」の代りになる艦を王に寄進するためにロンドン市民が犠牲を払った。

ここでは艦の炎上を「ネロのローマ」のそれにたとえているのだが（13～14行）、そのたとえがせつかくの艦を失って市民に負担を掛けた経緯を何か立派に見せているとは言えない。『北風の道』の連4が現在の事柄に歴史上の、又は神話・伝説上の有名な出来事を重ね合わせて良い面や悪い面を拡大する手法を取っていることを指摘済みであるが、軍艦炎上の「拡大」はその悪い面を強調するためのものである。

**25～40：** 海軍の大立者〔サー・ウィリアム・〕コヴェントリー（Sir Willima Coventry）は金銭面で貪欲である／**41～52：** 指揮官ヨーク公が病気のオランダ海軍提督オブダム（Opdam〔正しくはObdam〕）に気を遣ったために、せつかく追い詰めたオランダ軍の逃走を許した。

この段の書き出しは英艦隊が出港する時に帆を膨らませるさまをコヴェントリーの財布が膨れるさまにたとえているが、ウォラーによるチャールズ1世の海軍についての詩やウェルギリウスの『アイネーイス』の一節を下敷きにしてもいる（POAS 1, 41n; Smith, 41n.）。疑似英雄詩が効果をよく發揮している個所である。又、英艦隊がオランダ艦隊を逃がしたことを猟師が野ウサギを優しく見逃すことにたとえたり（47～48行）、英国商船隊の護衛艦の艦長がオランダ艦隊を味方のそれと勘違いして近づきまんまと拿捕

された事件を、漁師が魚が確実に餌に跳びつくようと餌を前夜中に撒いておくさまにたとえている（51～52行）。これらは大規模で通常ではないなものを小規模で平凡なものにたとえているのだが、例えばオウィディウスの『変身物語』が神々やそれらに類する存在の行為や運命等を人間その他の生物のそれらにたとえる場合を想起させる（この場合、描写の現実味が増す）。何れも本作書き出しと同じく、古典の調子で不必要に文体を高めて、その分内容の低さを目立たせることに成功している。

**53～108：** ヨーク公夫人が艦隊帰港地へ赴く（53～74行）、他。

この個所は53～74行、75～90行、91～108行の段から成り、最初の段は『画家への指示』の77～90行と対応する。『画家への指示』のその個所については、次のようにコメント済みである——敵を壊滅させる機会を逃して補給のために帰港した艦隊の乗員等が女性を相手にしたりしてどんちゃん騒ぎをしたが、海上で危険な目に遭っていたのだからそれも無理はない、というように否定的に描いてはいない；このような行動を、本作は英海軍の怠惰・無能等の例として扱っている。

どんちゃん騒ぎに加わった女性の中に、指揮官ヨーク公の夫人がいた。彼女が夫の艦隊の寄港地を無数の馬車で「襲う」（56行）と大げさな擬英雄詞調で書いた後に、その様をオカガニが自然の摂理に従って交尾する時に海へ潜ることにたとえている（57～58行）。上述のように、文体を高めることと卑近にすることを並行して行っている。港へ向うヨーク公も同じ手法で描かれている（59～62行）。残りの部分では、ヨーク公が夫人をもてなした様子をアントニウスがクレオパトラをもてなした時よりも立派だった（71～72行）等と大げさに語っている。続いて、この個所を構成する幾つかの段の概要を示し、筆者のコメントを加える。



75～90： この段では、まず、海戦に再び出掛けるヨーク公とその夫人の悲しい別れは描くな、と命じる（75～78行）。続いて、ヨーク公夫人が夫の身を託した海軍のお偉方達が死を免れるために臆病な方法を取ったことを風刺する（83～90行）。ヨーク公は助かるための彼等の方法を採らないで、戦火から遠く離れて他の者を自分の前に置くことにした。

本巻の83行への注は、好事家への風刺があることを指摘している。お偉方の一人（王立協会初代会長）がトビウオのヒレを集めて、〔艦が沈んでも〕それらを付けければ空を飛べるのではないかと思ったからだ（83～84行）。『愚人列伝』でも風刺の格好的になっている好事家が、海戦の場でも収集癖を発揮している。愚人の習性は生命の危機に瀕しても失われぬというわけだ。とは言え、臆病ゆえの逃避の工夫に関してはヨーク公が現実的であり、愚人の部下より一枚上手である。

91～108： この段の101行までは、ジェームズ1世の孫でチャールズ2世の甥であるルーパート王子（Prince Rupert）があまり戦力にならない様子を描く。102～08行はサンドウィッチ伯爵（Earl of Sandwich）の腰抜け振りを描く。伯爵は、古代ギリシアの詩人・音楽家アリーオーンのように戦いたいと思った。自分の大好きな楽器の音色で敵兵を魔法にかけて命拾いをしよう、〔艦から落ちたとしても、音色が分る〕懸命なイルカがやって来て、自分を陸まで安全に乗せて行ってくれるだろう、と思った<sup>19)</sup>。このような態度だったので、海戦後に官報で、〔打撃を被った自艦で死傷者が出ていたのに〕自宅の居間にいるかのように無頓着だった、と書かれた。

勇猛だったが今は病気になって頭痛に苦しむルーパートは〔敵弾が当たらないように〕箱に納まって頭を出しているだけであり、それを詩人は壊れた晴雨計にたとえている（94行）。続いて、情けない外観とは異なり王子の内にはヘーラクレスが潜む、等と書く（95～98行）。ここでは人物を矮小

化する卑近なたとえの後に神話利用の拡大を行っているが、ありもしない勇気があることを大げさで平板なたとえで表しているの、その拡大よりも矮小化の方がより巧みであり、実情をよく表しているように見える。詩人は王子の病が性病であると暗示しており (Smith, 91n; Everyman, 89n)、そのための苦痛が彼の勇気を募らせているとか (97~98行)、頭痛に悩む彼に性病をうつした女を旧約聖書士師記において戦に敗れて助けを求めて来たカナン軍の將軍を匿うふりをして彼の頭に釘を刺して殺した [=最悪の「頭痛」を与えた] 女ヤエルにたとえて呪ったりしている (99~100行)。苦痛が勇気を増すというのは空疎な言い回しであるが、聖書を利用したたとえの方は風刺効果を高めている。なぜそうであるかを少し考えてみよう。

『北風の道』と『画家への指示』には、実在しない又は乏しい (と思われる) 美德や能力及びそれに付随する事象——簡単に言えば、嘘及びその類——を神話や伝説を用いて肥大化させ、その結果作者の意図に反して描写の嘘くささが際立つ部分がある。上昇を試みるとそれが実は下降していることになる逆転現象は愚人につきものであるが、稚拙な体制擁護詩を書く者もその逆転を実践していると言えるのではないか。本作のヘーラクレスの豪胆への言及も嘘くさいが、それは勿論画家詩のパロディーを実践する詩人が狙っているものである。それに対して、実在する (と思われる) 悪 (私利私欲、怠惰、無能力、性的放縦、等々) やあって然るべきなのにない美德及びそれに付随する事象を神話や伝説を用いて肥大化させると、理想と現実のギャップをより効果的に表現し得て、風刺の目的にかなうのだ。

サンドウィッチが艦に楽器を持ち込んでいたのは事実なので、アリーオンへのたとえは全くないものがあると言うためのものではない。神話利用が嘘くささを増しているわけではない。その楽人がイルカに救われる故事を伯爵の臆病風と結び付けているのは、作り話ではあるが機知に富んでいる。それに続く、実際の官報記事における低評価を引用しての風刺は、

神話・伝説を利用しない、同時代の事象に基づく風刺として成立している。本作には画家詩のパロディーと（疑似英雄詩ではない）神話・伝説を利用する風刺と現代の事象を叙述する風刺が混在している。

109～120： 英艦隊はまだ小戦闘をただけ、いよいよ本格的戦いに入るから、それ〔ミケランジェロの『最後の審判』より描くのが難しいもの〕を描く準備をしろ（109～12行）；英艦隊の航行の様子を描けと指示してから、この船団を作るためにどれほど国税が費やされたか、それに乗じて〔エドワード・〕ハイド（Edward Hyde）即ち大蔵卿クラレンドン伯爵や〔国會議員ロバート・〕パストン（Robert Paston）がこの海戦で私腹を肥やしたかと、書く／121～26： イルカや海鳥が英艦隊の速く力強く航行するのに驚くさまを描け；海戦の名残を追え。

109行以下の段は戦の負の面を強調しているが（114～20行）、同時代の事象をたとえ抜きで叙述する風刺がほとんど全てを占めている。

127～54： オランダ艦隊が恐怖心を隠して英艦隊に接近するのを、英艦隊側も同様に怖がっているのを、特にヨーク公が最も臆病風に吹かれて胸中を吐露するのを描け（127～34行）；その彼は、戦争の道具である船を発明した〔旧約聖書の〕ノアや火薬を開発して戦闘用にしたドイツの「魔法使いの坊主」（141行）を呪う（135～44行）——こいつらさえいなかったら俺はこんな戦の場になくてすんだのに、というわけだ；呪詛の145行から最後の54行までは、クラレンドン伯爵を非難している——オランダを利するようなことをしている、ダンケルクをフランスに売却して私腹を肥やした、スコットランドの要塞の一部を売った、フランスによるオランダとの仲介を拒絶した、娘のアンが王妃になるのを望んだ、等とヨーク公に言わせている。

この呪いの部分は、わざと稚拙に作ってあるようだ。ヨーク公の頭脳の程度が低いと示唆したいのかも知れない。最初の部分は箱舟を造ったノアに言及しているので神話・伝説を利用しているが、くだらないものを持ち上げて実は貶めている擬英雄詩になってはいない。火薬開発のくだりは歴史上の事柄に基づいており、クラレンドン非難は詩人と同時代の大立者の悪行をストレートに攻撃する風刺になっている。ヨーク公は王政復古のすぐ後にクラレンドンの娘アンと秘密裡に結婚しているので、彼が義父によるダンケルク売却（1662年）等の行為を非難するのは不自然に思える。伯爵は娘と侯爵の結婚に猛反対したこともあり（POAS 1, 153-54n；Smith, 154n）、伯爵と義理の息子の関係が悪くて後者が前者に文句を言うことがあるかも知れない。しかしここでは、クラレンドンを攻撃したい詩人の気持ちが勝って、不自然さに目をつむって、ヨーク公の口から宮廷の大物に対する非難の言辞を吐かせているのではないか。

155～244： ローストフト海戦を描く部分の書き出しはこうである——海神ネプトゥヌスが〔自分の領域で争いが起きているので〕物憂げであるのを描け、ニュムペー〔ニンフ〕達が怖がって岩の隙間に隠れるのを描け、〔山の精〕エコー〔エコー〕が虐殺されて、行き交う砲声だけが木霊するのを描け（155～62行）。

古代神達を登場させて海戦の凄まじさを描いているが、実際の戦闘が激しかったので（本作の途中に、何隻もの艦が爆発して乗員が宙に舞っている版面が載っている）、描写に嘘くささはない。だが、特に機知に富んでいるわけでもない。

163～78： 海戦の具体的描写を始めるこの段では先ず、オランダ軍のオブダムがヨーク公に迫るものの、自分の艦が爆破されて戦死する。他方英国

側では、副提督の一人である〔サー・ウィリアム・〕ローソン（Sir John Lawson）が戦死する（～78行）。参考までに、ウォラーの『画家への指示』はこの辺りを概略こう描いている——137以下： オプダムがヨーク公の艦に迫る／145辺り： ヨーク公の艦で戦死者が出る／160以下： 仲間を殺されたヨーク公が復讐心に燃える／185以下： オプダムの艦が爆破炎上する／205以下： 大将を失ったオランダ側がヨーク公の進撃に激しく恐怖した。

オプダムの描写には「空威張りして」（164行）のようにからかう調子が若干あるが、ローソンの戦死の描写に風刺の要素はない。死ぬという運命をものぐ勇気を持ち主である彼は死の世界でもオプダムと戦っている、と書かれている（177～78行）。実際に立派な軍人だったので、風刺の対象にはなり得ないのだ。となると、この詩の実態はパロディーの器である擬英雄詩、（既述のように）現代の事象に基づく言わば普通の風刺、武勇を讃えたりする戦況報告（神話や故事等を利用する場合もあればそうでない場合もある）その他のどちらかと言うと客観的な叙述のハイブリッドではないか。

179～88： ファルマス伯爵（Earl of Falmouth）の戦死；チャールズ2世とヨーク公ジェームズが気に入っていたこの若者は運だけで出世してきた能無しだったが、敵弾で頭が飛び散ったら初めて脳があることが分った／189～96： ファルマスの弟は、兄の死を聞いて臆した行動を取った——兄が死んだ今となっては、自分の家の血筋を絶やしてはいけないので、これからはいい子にして戦争には絶対行かない、と決めた。

ファルマス兄弟の描写は、ローソンのそれとは対照的に、皮肉たっぷりである。たとえ抜きの風刺であるが、機知が効いている。

197～214： ヨーク公を襲おうとしたオランダ艦と、それを阻止した英艦との戦いの様子／215～26： マールバラ伯爵（Earl of Marlborough）の死／

227～32： この海戦で真に勇敢に戦った者が少ない。

197～214行には風刺や皮肉は感じられない。マールバラ伯爵の死に関しても同様である。この辺りでは、真の勇者（上述のように、彼等は風刺の対象にはなり得ない）が死に、臆病者が生き残るという定めを嘆くのが主眼であるようだ。政府批判のための画家詩のパロディーであるとは言え、海戦の全側面を否定的に描くことはできないだろう。仮にそうすれば風刺家が嘘を書いていると批判されて、彼の政治的目的には叶わないだろう。しかし、次段以降は再び英国側の失態等を攻撃している。

233～44： ヨーク公の側近〔ヘンリー・〕ブロンカー（Henry Brouncker）の行動によって、せっかく優位に立っていたイギリス軍がオランダ軍にとどめを刺せなかった；この失態の張本人たるブロンカーが、今は議会議員になっている。

ブロンカーは、83～88行で死にたくないで臆病な工夫をしようとしたと馬鹿にされている「お偉方」の一人である。彼は、例によって臆病風に吹かれたからであろうが<sup>20</sup>、指揮官ヨーク公が寝ている間に、〔敵艦隊とぶつからないように〕勝手に艦の向きを変えたのだ（POAS 1, 239-42n）。

245～52： ローストフトの海戦を描いた後は、オランダ商船隊を襲おうとするイギリス軍（ヨーク公の後継者サンドウィッチが率いる）の行動を描け／

253～58： 〔中立国〕デンマークの港に逃げ込んだオランダ商船を攻撃するための交渉をデンマーク側と行う〔サー・トマス・〕クリフォード（Sir Thomas Clifford）は、主人である〔国務大臣〕アーリントン伯爵（Earl of Arlington）のために戦利品を漁るような人物である／259～70： ロイテル提督（Michael de Ruyter）が率いるオランダ艦隊が母国へ戻ってくるのに、サンドウィッチの艦隊はそれを阻止し得なかった；彼は戦いたくないので

敵艦隊を見て見ぬふりをして、艦長も、同乗の〔サンドウィッチの甥エドワード・〕モンタギュー（Edward Montagu）も、クリフォードも、それにならった／271～86： 英国がオランダ領へ逃げ込んだオランダ商船隊を捕獲する計略を立てるが、この時、〔女王に無礼を働いて官職を失った〕モンタギューがある船の船長になっている：商船隊捕獲のためのデンマーク側との交渉に手間取っている間に、準備万端のオランダ側が商船隊を襲おうとした英小艦隊を撃滅した／287～94： イギリス軍を撃破したオランダ軍が、英国が狙っていた商船を安々とエスコートした／293～94： オランダ商船を追うべくサンドウィッチがやって来たが（see 295-304n）、又もや敵を見過ごした。

295～310： 詩人が画家に、陸へあがる前に最後の筆を揮え、と語る：英国側がくつろいでいる間に、そうしている我々を責めるかのように、嵐がオランダと戦おうとする様子を描け：嵐で流されたオランダ船を簡単に奪うことができたはずなのに、臆病なサンドウィッチが手を出さなかった：オランダ商船からの分捕り品を彼が一部の海軍将官と勝手に山分けしてしまった：しかし、その戦利品分配について考え直して、王のところへ行って相談をするために不在の時に、艦隊を立て直したオランダ軍がイギリス領海やテムズ川に出現する／311～16：〔無断で船荷をほどいたかどで〕スペイン大使へと棚上げされたサンドウィッチが、スペイン沖で、検疫のために長い停泊を余儀なくされた——「彼にはきれいな体になるまではイングランドへ帰って貰いたくはない」（316行）。

ローストフト海戦後の英艦隊は、ロイテル提督の艦隊を迎撃することとオランダ商船隊の拿捕又は撃滅を目的としていた（POAS 1, 247-48n）。しかし、新指揮官が臆病者サンドウィッチであること（POAS 1, 252n）が第一の不安材料である（251～52行）。この伯爵とクリフォードの描写（245～58行）

は、擬英雄詩ではない風刺である。ロイテル艦隊を見逃したことに關して、敵の姿を見たくないサンドウィッチが両眼を閉じると、艦長が左目を、モンタギューが右目を閉じて、クリフォードがサンドウィッチの閉じた目が開かないように封印することを申し出た、と書く。そしてその様子を、『オデュッセイア』の巻12において、ウリッセースの船がセイレーン達のそばを通る時に、部下の船員達（彼等はセイレーン達の声を聞かないように耳栓をしている）がウリッセースをマストに縛り付けたことにたとえている（Smith, 269-70n）。このカブレットでは神話・伝説・古典を利用して風刺の効果を高めようとしているが、目を閉じることをマストに身体を縛り付けることにたとえるのはぎこちない。ウリッセースの部下達が耳栓をするというのは筆者による補足説明であり、それがない原文「部下達によってマストに縛り付けられた」（270行）では、目を閉じることとの間に類比が一層成立しにくいのではないか。

271～86行の段におけるモンタギューが船長になっているというくだりの原文（276行）は、「木の馬の長へ格下げされている」（Dwindl'd into the wooden horse's master）である。彼は船長になる前は女王の主馬頭（Master of the Horse to the Queen）だったので（POAS 1, 275-82n；Smith, 275n）、宮廷の馬の長から木の馬である船の長への変化の描き方は機知に富んでいる。スミス版は、英国側がオランダ商船隊を襲うことにギリシアがトロイアを襲う故事が重ねられている旨を注記している（Smith, 276-82n）。「木の馬」がトロイアの木馬を類推させると考えているのだろう。しかし、「木の馬」には詩語で「船」の意味もあるので、トロイア戦争へのたとえを持ち出すまでもないのではないか。仮に詩人がこのたとえを意図していたとすれば、その効果がどれほどあるのか疑問である。この段の締め括りのカブレット（285～86行）は、戦死したモンタギューの姿を花嫁にたとえて彼が洒落者だったことを皮肉っている（Smith, 285n）。トロイア戦争へのたとえがないと考えれば、



この段の大部分は英国側の不手際に関する批判的叙述であることになる。

287～94行には、英国側によるオランダ商戦攻撃をクルミの身を枝から落とすために幹を叩く方法にたとえる個所がある——「彼等の舟はクルミ材からできているかのように、／叩けば叩くほど抵抗した」（291～92行）。本巻注（POAS 1, 291-92n）は木を叩くのは実を落とすのに推奨できる方法ではないという『ブリタニカ百科事典』第13版（1926年）の説明を引いているので、それを読めば、英国側の攻撃が無駄に終わったことのとえとしては成立しているように見える。しかしその後、「女とロバとクルミの木は叩けば叩くほど良い」という諺を紹介している。スミス版の注は、この諺に加えて、それと同趣旨のある詩句を引いている（Smith, 291-92n）。エヴリマン版の注はこの諺への仄めかしがある、とだけ書く（Everyman, 287-88n）。これらは木を叩くのが有効であるという言なので、本作のとえとは意味の方向が異なる。となると、クルミの木叩きのたとえが読者を混乱させることがあるかも知れない。このたとえやウリッセースへのたとえが巧みであるとは言えないのは、本作が全面的にマーヴェルの手になるものではないこと（スミス版解説の指摘〔前述〕）の表れではないか。

295～316行は主としてサンドウィッチに対する攻撃であるが、疑似英雄詩の要素はなくて、叙事的風刺である。サンドウィッチが戦利品を山分けしたというカプレットを「真珠」“pearl”と「伯爵」“Earl”で（305～06行）、オランダの軍艦がテムズ川を上って来たのが英国にとっては恥だったというカプレットを「恥ずべきこと」“Shames”と「テムズ」“Thames”で韻を踏むなど、機知に富む個所がある。サンドウィッチがスペインで検疫をうけている云々は、この男がきれいになることはあり得ないので、一生国外に置くべきである、というのが真意だろう。又、彼が性病を患っていると読者に思わせる意図があるかも知れない。

317～34： これまで戦ってきたが、何のためか分らず、何をしたのか、何を  
得たのかも分らない (317～18行)<sup>21)</sup>；大洋を娶る [=海の支配権を握る]  
ためにこれほど骨折りするとすれば、諸国の君主が団結して、この結婚に  
反対するだろう (319～20行)；戦が狂信者を放逐するためのものであるなら  
ば、その目的に反して、戦によって却って狂信者が増えることになる——  
〔戦で〕具合が悪くなり貧しくなると、皆が狂信者になるからだ (321～22  
行)；それが下院議員に報いるためのものであれば、彼等の褒美になる職権  
は他へ移されている (323～24行)；しかし、この戦が〔ヨーク〕侯爵夫人の  
私腹を肥やすためのものであるとすれば、それは大成功だった (325～26  
行)；両院を憎むべきものとして認めさせるためならば、又、常設軍を確保  
するためなら、結果は残念なものである (327～28行)；或いは又オラニエ公  
(Prince Orange) を復位させるためのものであるなら、そうなる代りに、彼  
は退廃しているのではないか (329～30行)；そして、何百万ポンドも無駄に与  
えたり損したりして我々が得たのは、ポン引きのアーリントン伯爵 (Earl of  
Arlington) の働きでオラニエ家に庶子ができたことだけである (331～34行)。

この段は画家への助言を終えて詩人が語る形を取っている。この戦争が  
大多数の者にとって無益であるが、ヨーク公夫人のように少数だが得した  
者がいるというのが主旨である (POAS 1, 325-26n)。ここも同時代の悪をス  
トレートに攻撃する風刺である。

335～40： 歴史を語る者は意見が合わないものだ——例えば、〔サー・ジ  
ョン・〕デナム (Sir John Denham) とウォラーの言い分が違うように；ウォ  
ラーは、クロムウェルに捧げるエレジーを書いたことを悔いた；そして、  
その証として、『画家への指示』を書いた；デナムの次のテーマとして課せ  
られるのは、ヨーク公の愛人になるはずだ／341～44： 無能なサンドウィ  
ッチが更迭されてルーパートとマンクが共同で海軍を指揮するようになっ

たが、前途は明るくない。

ウォラーがクロムウェルに捧げる哀歌を書いたことに関しては、反論の形式としてウォラー的称賛を王党派と共和主義の両方の観点から模倣することは、ウォラーがクロムウェルに向けた称賛と哀歌を発表した50年代によく行われていたとするスミス版解説（前述）を想起されたい。デナムは長詩『クーパーの丘』（*Cooper's Hill*）で有名な詩人であり、本巻「文芸」部門収録の『詩人達の裁判』（*The Session of the Poets*）第31～32連に「乱れる韻律の老歌人」として登場する。筆者はこの裁判詩を論じた際に、『クーパーの丘』を盗作であると非難する作者とデナムと関係が深い書籍販売業者がクラブ街的環境を構成する、と論じている<sup>22)</sup>。エヴリマン版の注は、本作が当時精神異常であると知られていたデナムが書いたふりをしている、とする（*Everyman*, 332n）。ウォラーが回復した王政に対して甘言を弄する一方で、デナムが宮廷批判の詩を書いたのは彼が正気を失っているからである、と逃げを打っているのだろう。本巻解説とスミス版の解説が指摘しているところの作者を隠す試みである。筆者としては、デナムとウォラーの意見の違い（であるとするもの）をヘボ詩人同士の争い——愚人の内輪揉め——と見なして、自分と彼等のような低次元の詩人との間に距離があると思わせることにより作者隠ぺいの工夫を補強している面があるかも知れない、と考える。但し、画家詩のパロディーという機知に富む手を理性喪失が周知の詩人の仕業であると信じた人が多かったとは思えない。

デナムの自作のテーマになるはずのヨーク公の愛人とは、デナム夫人である。デナムは宮廷の建築関係の監督官でもあるから、「建築家」である夫人の絵をどう描くかを職務上助言するのが次作になる——このように卑猥な言葉遊びをしている（*POAS* 1, 340n; *Smith*, 339-40n）。335～40行の段はその前段と同じタイプの風刺である。

345～68： ここは「国王へ」(To the King)という題の反歌であり、チャールズ2世の治世を称えながらも、彼の周囲のクラレンドン等の亡国の徒を抑えよと忠告する。

この反歌は、本作が『画家への指示』の悪意ある模倣なので当然のことであるが、元歌の反歌「国王へ」と対照をなす(POAS 1, 353-54n; Smith, 351n; Everyman, 349-50n)。『画家への指示』の反歌は、王がいかによく海軍を率いて英国を勝利に導いたかと讃えたり、彼を古代の英雄や神と同列視・神格化したり、海軍が王の権力の象徴であると言ったりする。又、王の偉大さは絵では描き切れないと言ったり、王を精神に、臣民を体の器官にたとえたりしている。王の太陽へのたとえ(本作346～47行)は伝統的なものであり(Smith, 347-50n)、『画家への最後の指示』の反歌もそうしている。

王の周囲の亡国の徒に関しては、特にクラレンドンを「英国のダイダロス」(353行)と呼んで、国王を入れる迷宮を作ると非難している<sup>23)</sup>。彼は対オランダ戦開始の張本人である(359～60行)。クラレンドンをダイダロスにたとえる流れで、チャールズ2世をミーノースにたとえている(355行)。ミーノースは無力な王であるが(Smith, 351n)、その無力さを「戦時において王はトランプのカードにすぎず、平時には神々として扱われる」(368行)と非神話的たとえで表して、この詩を終えている(See POAS 1, 368n; Smith, 368n; Everyman, 364n)。神話等へのたとえが効果的であり、風刺としての出来が良い。

本作の反歌はチャールズ2世の治世を称えているが、それには「一応」という語を付け加えるべきだろう。チャールズは頼りないというイメージが既に定着しつつあるようで、そのイメージが国王自身への反感へと転じるのは時間の問題である。時が移ると、チャールズ2世とその後継者ジェームズ2世を直接の標的とする風刺も現れる。『画家への第四の助言』と『第五の助言』には反歌もなくて、チャールズ2世をあからさまに攻撃して

いる。英海軍とそれの指導者の不甲斐なさや宮廷上層部の腐敗等の風刺を主目的として画家詩のパロディーが始ったわけだが、このジャンルは最初の作品から既に国王が最大の標的——愚人の中でも最たるもの——に入ると見越しているようだ。

注

- 1) 中央大学人文科学研究所研究発表（2017年1月28日）に一部基づく。
- 2) 土井治氏による邦訳題名は『三文文士』（秀文インターナショナル、1988年）。
- 3) 里麻静夫「トロロプの『今の我々の生き方』とギッシングの『三文文士』に見る文芸上の愚人」、『英語英米文学』（中央大学英米文学会発行）第57集（2016年）所収。
- 4) *Poems on Affairs of State: Augustan Satirical Verse, 1660-1714, Volume 1: 1660-1678*, ed. George deF. Lord (Yale University Press, 1963; Second printing, 1975).
- 5) 「『国事詩集』を読む—第1巻「文芸」部門に於ける愚人像（1）」、『英語英米文学』（中央大学英米文学会発行）第59集（2019年）所収。同（2）、同60集（2020年）所収。同（3）、同62集（2021年）所収。
- 6) 筆者が本巻の「文芸」部門とトロロプ及びギッシングを論じた際に用いた言葉。
- 7) 小野功生「王政復古の文学」——喜志哲雄 = 監修 / 圓月勝博・佐々木和貴・末廣幹・南隆太 = 編集『イギリス王政復古演劇案内』（松柏社、2009年）の第2章。
- 8) Pat Rogers, *Grub Street: Studies in a Subculture* (Methuen, 1972).
- 9) 『愚人列伝』の本文はトウィックナム版に依る——J. Sutherland ed., *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*, Vol. V, 3rd ed. (Methuen; Yale U.P., 1963).
- 10) 前述の小野氏の記述を参照されたい——『イギリス王政復古演劇案内』, 23~24ページ。以下も参照——E. Rothstein, *The Routledge History of English Poetry, Vol.3: Restoration and Eighteenth-century Poetry 1660-1780* (Routledge & Kegan Paul, 1981), p. 36.
- 11) 後述の『第二の助言』に関する本巻解説もこの点を指摘している。
- 12) George deF. Lord (ed.), *Anthology of Poems on Affairs of State: Augustan*

- Satirical Verse 1660-1714* (Yale University Press, 1975), p. xxv.
- 13) 以下を参照—— N. Jose, *Ideas of the Restoration in English Literature, 1660-71* (Macmillan, 1984), pp. 2-3.
  - 14) POAS 1, p. 21. この形式の効用については以下も参照されたい—— C.V. Wedgwood, *Poetry and Politics under the Stuarts* (Cambridge U.P., 1961), pp. 145ff.; Jose, pp. 99-100; J.D. Hunt, *Andrew Marvell: His Life and Writings* (Paul Elek, 1978), pp. 149ff.
  - 15) E. Rothstein, *The Routledge History of English Poetry, Vol. 3: Restoration and Eighteenth-century Poetry 1660-1780* (Routledge & Kegan Paul, 1981), p. 36; POAS 1, p. 20. Cf. Wedgwood, pp. 146ff.; Jose, pp. 99ff.
  - 16) 吉村伸夫 = 訳『マーヴェル詩集』(山口書店, 1989年)。
  - 17) *The Poems and Letters of Andrew Marvell, Vol. 1. Poems* (3rd ed.), ed. H.M. Margoliouth (Oxford U.P., 1971); *Andrew Marvell: The Complete Poems*, ed. E.S. Donno (Penguin Books, 1972); *Andrew Marvell: The Complete Poems*, ed. G. deF. Lord (Everyman's Library, 1984); *The Poems of Andrew Marvell* (Revised ed.), ed. N. Smith (Routledge, 2007). スミス編詩集は, “The Advice-to-a-Painter and Associated Poems” というセクションに『第二の助言』, 『第三の助言』, 『クラレンドンの新築祝い』, 『画家への最後の指示』(*The Last Instructions to a Painter*) をまとめている。
  - 18) 表面的には英雄的に描いていても実は失態を描いている手法に関しては, 以下を参照—— J.D. Hunt, p. 156.
  - 19) スミス版の注によれば, アリーオーンは溺れそうなところをイルカに救われた (Smith, 102n)。
  - 20) Cf. Everyman, 229-40n: “Brouncker seems to have been terrified of another battle.”
  - 21) See Jose, p. 101; Hunt, p. 152.
  - 22) 上記拙論「『国事詩集』を読む—第1巻「文芸」部門に於ける愚人像(1)」を参照されたい。
  - 23) POAS 1, 353-54n; Smith, 354n; Everyman, 349-50n; Wedgwood, pp. 147ff. on ll. 353ff.